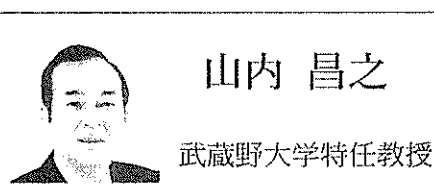


# 読賣新聞

## 地球を 読む

トランプ米大統領の中東政策の要素を頭文字で並べると「ISRAEL」になる。イラン(I)を敵視し、サウジアラビア(S)と関係を強める。オバマ前政権とは正反対(Reverse)の動きだ。目標は米国製兵器(Arms)の売却。関与(Engagement)はするが無鉄砲で、自分が要(Linchpin)だと主張する。アラブの一論客の見方だ



山内 昌之  
武蔵野大学特任教授

### トランプ氏と中東

## 解説の鍵「ISRAEL」

官と、その夫クシュナー上級顧問がユダヤ教正統派に属する環境も影響している。ただ、興味深いのは、「ISRAEL」が単なる語呂合わせを超え、虚実混ざり合うトランプ中東戦略の本質を読み解く絶妙なキーワードとして、さらなる考察に値することだ。Iのイラン。ボルトン国家安全保障担当大統領補佐は、かつてイラク戦争を推進した人物だった。しかし戦争は、結果としてイラクからシリアにかけてイランの援助を受けたシリア派

できる戦略的ビジョンを持つ国家となった。かつてサウジとイスラエルは9・11米同時テロ後、ブッシュ政権にイラクでなくイランへの攻撃を迫ったことがある。サウジの最高実力者ムハンマド皇太子は今でもイラク戦争のように、米国の兵力主体でイランと軍事対決することを望んでいる点で、イスラエルのネタニヤフ首相と大差がない。

皇太子は、自国安全保障に直結するイエメンには軍事干渉を惜しまないが、シリア派大國イランと単独で対決するには力不足だろう。いずれにせよ、イスラエル、サウジ両国の接近はトランプ氏の歓迎するところだ。 (2面に続く)

## 地球を 読む

1面の続き

「ISRAEL」の標語で3番目のRは、トランプ大統領が常にオバマ前大統領と「正反対」(Reverse)の姿勢をとることを指す。見逃せないのは、オバマ氏の外交遺産を否定するトランプ氏の手法が、単純な意趣返しを越えて、政治的には存外「戦略」めいていることだ。

オバマ氏は、イスラエルとサウジアラビアから求められたイラン核合意破棄を拒否したことで、両国との関係を短期的に緊張化させた。トランプ氏はあべこべに両国の反イラン政策を受け入れ、米国の中東戦略を補強させる要因として活用しようとしている。

山内昌之氏 1947年、札幌生まれ。ハーバード大客員研究員、東大中東地域研究センター長を歴任。東大名誉教授。近著に「民族と国家」。

一方、トランプ氏は、米中東政策を進めようとする。一方、トランプ氏は、米中東政策を進めようとする。一方、トランプ氏は、米中東政策を進めようとする。

## 「傲慢」の先に「孤独」への道

による外交政策を進めようとする。一方、トランプ氏は、米中東政策を進めようとする。一方、トランプ氏は、米中東政策を進めようとする。

「ISRAEL」の標語で3番目のRは、トランプ大統領が常にオバマ前大統領と「正反対」(Reverse)の姿勢をとることを指す。見逃せないのは、オバマ氏の外交遺産を否定するトランプ氏の手法が、単純な意趣返しを越えて、政治的には存外「戦略」めいていることだ。

「ISRAEL」の標語で3番目のRは、トランプ大統領が常にオバマ前大統領と「正反対」(Reverse)の姿勢をとることを指す。見逃せないのは、オバマ氏の外交遺産を否定するトランプ氏の手法が、単純な意趣返しを越えて、政治的には存外「戦略」めいていることだ。

英文はあすのジャパン・ニュースに掲載する予定です